＜保健室での様子＞

本園の保健室は、けがや具合の悪い時に来るのはもちろんのこと、絵本も置いてあり、図書室のような機能を兼ねている。保健室では、子どもたちがクラスの枠を越えて出会う中で過ごしている。養護教諭は、けがなどへの応急処置の対応をしながら、保健室で過ごす子どもたちと関わっている。子どもたちが保健室で過ごす理由は「痛いから、もう少し休もう」「絵本を見たい」「今は静かな場所にいたい」「誰かに気持ちを受けとめてほしい」など様々である。

異年齢の子どもたちが一緒に過ごす保健室は、どの学年の子どもにとっても落ち着ける空間にしたいと考えている。「幼稚園は安心」と思える場の一つとして保健室が位置づくことを大切にしている。

３歳児：保育室は保健室から場所が遠く、保健室に来たことのない子どもたちもまだたくさんいる。また、なにかあった時は、先生と一緒に来ることもあるが、この時期は呼ばれて、私が保育室に出向くことも多い。今の時期だからこそ、ふらっと来てしまっている３歳児もいる。様子を見ながら、保育室でのできごとに気持ちがつながるような声かけをし、一緒に保育室まで行ってみたりして、保育室と子どもが繋がるような関わりを意識している。けがをして先生と来た時には、安心してからだを預けることが出来るような、手当てを心がけている。

４歳児：保育室と近く、様々な訪れ方をしている。保育室と同じように来る子ども、保育室とは少し違う静かな空間を求めてくる子ども、まだ不安で常に養護教諭がいるところで安心と感じて訪れる子どもなどがいる。保育室と保健室を行き来しながら、保健室という場所を感じている子どもたちも多い。３歳から進級した子どもにとっても、４歳で新しく入園した子どもにとっても、保健室に行けば先生がいるという場所であることも分かってきたようだ。中には、「ここが痛い、こっちも痛い」と、不安な気持ちを、けがや痛みとして表現し、先生はどのように手当てをしてくれるのか、どのように受けとめてくれるのかと、様子を伺っている子どももいる。保育室とは別の場所でありながら、比較的近い保健室が、子どもたちにとって少し静かな場所を選びたい時、少し離れて過ごしたい時、少し不安だけど保育室の雰囲気も感じていたい時、といった子どもたちのそれぞれの状態にあわせて、落ち着いた時間を保健室で過ごすことができるよう、子どもの思いを受けとめ、養護教諭としてその時間がその子の次の生活へつながっていくような関わりを大切に、担任と連携しながら子どもたちを支えている。

５歳児：この時期、子どもたちが生活の中で出会う生きもの、昆虫などを保健室にある図鑑などで調べたりする姿が多くみられる。不安な気持ちから保健室で過ごす姿よりも、生活や遊びを充実させるために保健室を活用する姿が多い。一方で、友達との関わりが深くなり、遊びの中で対立したり、葛藤したりして１人で過ごしたい時に気持ちを切り替えるための場として利用するなど、各自が必要な時に、必要に応じて訪れ、過ごしている。また、年中時から路線図を書くことに熱中している子どももいる。別々に来て、路線図を書いて過ごしていた２人だが、同じ場で書いているうちに仲良くなった。落ち着いて過ごすために保健室で始めた、路線図書き。これからは一緒に楽しめるよう、保育室でもできるような声かけもしていきたい。

さらに、５歳児には、保健室で自分もみんなも気持ちよく過ごすには、自分たちだけでなく、他の子ども達にとっても気持ちよく過ごせるような心配りを子ども達と一緒に考えられるようにしたい。

＜最近の保健室での過ごし方＞

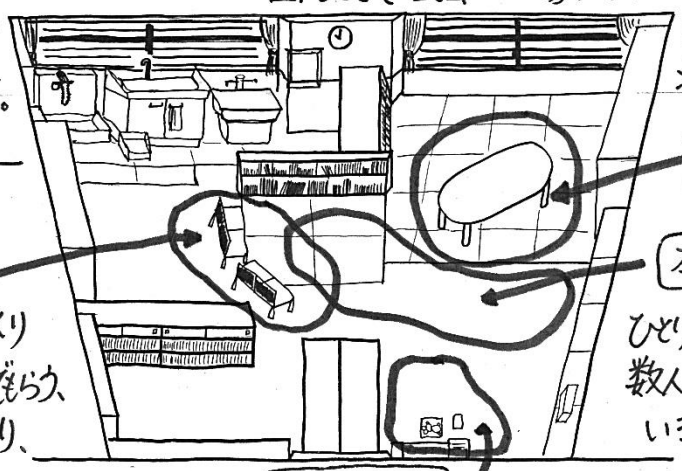
保健室
保育研究シート
（養護教諭）渡邉 満美

登園～

朝、玄関で挨拶をしながら
子どもたちの健康状態をみる。
必要に応じて
保護者ともやりとりをする。
その後、保健室で
子どもたちと過ごす。

テーブルを囲んで

路線図を書いて過ごしている子どもがいる。
本を読んだり、持ってきた製作物をおいたり、
囲むことで出会いの場になることもある。



自然につながり
次への活動の
原動力となると良い

ソファ

ひとりで座って本をじっくり
教師を間に本を読んでもらう、
数人で並んでおしゃべり、
いろいろな使い方
体調の悪い子がいる時は
ベッドにもなり、
横になれる場所

本棚の前

ひとりで本を読みに来たり、
数人で来たりと
いろいろな姿がある。

けがの手当て

手当てをうけている子どもの姿を見て
安心している子どももいる。
教師のうしろの方で
そっと本を読む姿もある。

片づけ～降園

各学年の様子をとらえて
保健室の片づけを促しながら、
保育室に戻るよう声をかける